

その二十日間のうちの前半は、特に日数を要する縦走計画に当てられるのが常である。

この頃には、北アルプス方面の残雪も、既に狭まった谷間のごく一部、例年晚夏に残る定まった地域、いわば大雪渓を除いてはわずかに残っている程度である。ましてや、西穂稜線には、全くといってよい程、その姿は見られない。言い換れば、雪上での滑落という心配は、頂上へ向かう稜線上では全くない。加えて、少し悪場になる個所には鎖が用意され、道の浮き石は片付けられ手入れされている。落石も二、三ヵ所で少し注意すれば、集団で登っても安全で快適なところといえよう。熱帯性低気圧の来襲もほとんどなく、雷雨の発生も割合少ない。今回憎んでもなお余りある雷雨の発生であるが、これがまた、晴天と登山と雷雨という皮肉な関係にあるのだから始末が悪い。気象学に全く素人の私でも、体験上、梅雨の間とか、熱帯性低気圧が接近している時は、曇天ばかり続いている、雨が降ったりやんだりのいやな天気であり、雷の発生はほとんどない。だから、雷が恐くてこれを回避しようとするならば、天候の悪い時に登山すれば良いことになる。といつてしまふくれて雨の中を苦労しながら、眺めのきかない頂上へわざわざ行ってくるような馬鹿はないだろう。その上、雷以上に高山での冷え込みに出くわす方が、危険度は何倍か高いのである。快晴で気温もぐんと上がり、灼熱の太陽の下、汗にまみれて、より高くより陥しく山に挑む。実に夏山の醍醐味である。しかし、こんな時こそ、最も雷の発生を呼ぶ危険が高いのである。しかも、天気が良ければ良い程、午後になって、地形を選んで局部的に、集中的に激しい雷になるようである。

雷について現在のところ、地方の測候所でも、時間・地域等具体的な予報はしていない。

「今日は夕刻頃、北アルプス方面に雷雨があるでしょう」

といった程度が最大限の具体性になっている。一概に、北アルプス方面なんていっても、例えば、北の白馬は快晴に恵まれ、南の乗鞍は雲に覆われ、笠ヶ岳には積乱雲が発達している状態だってざらにある。しかも、この積乱雲も、いつの間にかどこかに移動して消えてしまい、西穂には一滴の雨も落とさず、辺りに青空が見られるようなことだってしばしばあることは、山小屋の人々はよく知っている。

「雷雨があるでしょう……」

ということで、大事を取って登山をやめていたら、いつまでたっても登山なんか出来やしない。だから、小屋の人も絶対に登頂は駄目だ、などと自信を持って止めさせるようなことは絶対にしないだろう。仮に、その日快晴に恵まれた白馬を、雷の予報にもとづいて、登山中止をしていたら、頂上にいる人達の、笑い草になるだろう。

少し誇張気味だったかもしれない。少々くどくど言い過ぎたかもしれない。しかし、あえてこんなことを言うというのは、今回、登山史上まれにみる大惨事ということで、マスコミのあらゆるもののが取り上げたが、その中の二、三について非常に見当外れな扱いをしたものがあり、私はこれに反論をしたいからである。

客観的事実についての報道については、全く異論はないとして、これに対する批評や解説について大いに問題がある。しかも、これが直接関与しない人々の世論を、大きく左右するのだから、報道機関の取材そのものが、これ程、無責任で恐ろしいものはないと思う。

「登山家A氏の談」とか、気象学の大家「B氏の説明」等々。

「予測できた雷雨」「引率者に判断の甘さ?」「積乱雲が出たら避難、金物外し岩陰へ」などと見出しにして記事にすることは、当人自筆の原稿を載せるならば責任の持つて

行きようがあるから兎も角として、談話等記事にされた場合、当人の意図することや、その雰囲気を充分に伝えることができず、当人の真意との間に、しばしば食い違いが生じてしまうものである。

なんの場合でもそうであるが、当事者、特に批判される立場にある者は、神経を痛めながら、少なからずこの記事に異議があつても、この段階では余程の機会がない限り、それに対する反論を公にすることは不可能である。また、談話を載せられた当人にとっても、とんだ記事にされてしまって、後ろめたい面映ゆい気持ちで何日も過ごさねばならない羽目となってしまうことだってあるだろう。

マスコミの世界では、少々の食い違いについては、ひとたび活字にしたものについては、権威にかけて、なかなか撤回などしないのがお決まりであるし、大きな誤りであっても、片隅のほんの一程度のお詫びということで、片付けてしまうのが常識である。

事件の数日後、某紙に気象に関する専門家で登山の経験が豊富だという人の雷についての談話が載った。彼の豊富な経験から割り出した防止法ということで、再び悲劇をくり返さないためにと掲載したのである。

しかし、これはあくまで現場にそぐわない、一般論に過ぎないと思う。それによると、積乱雲が発生したら、すみやかに待避すること。気圧配置はどうか。雷が昨日は発生したか。「カミナリ道」はどのコースか、などを小屋の人達に尋ねたり研究したりしておくこと。日本の山では、たいてい一~二時間もあれば、小屋につけるから、早く小屋に避難すること、などともっともらしく掲載されていた。

しかし、実際問題として、万事を慎重に、こんなことをしていたら、シーズン中登山なんか出来やしない。言っている本人だって、恐らく山へ入れば、経験からくるある程度の勘を頼りにするだけで、さほどの配慮もなく、入山しているに違いない。とかく世間を騒がせた後には、遠いところからエライ人が、必ずエライことを言うものである。第一、カミナリ道なんてものが、今日の段階で、指摘できるものだろうか。ケモノ道ならいざ知らず、山小屋の人に聞いたところで、具体的に示してくれる人がいるはずがない。ただ、周りを見回して、首をかしげながら、およその雲の流れを示してくれる位なことで、結局は稜線が、いや、山という山全てが、被雷しやすいものであるということになってしまうのである。

北アルプスに限らず、谷川岳でもどこでもよいが、各ピークごとに落雷の数や、そのエネルギーを長年にわたって科学的に統計を取り、もしその辺からカミナリ道があると判断したならば、早いところ是非、地図にでも明記して公にしてもらいたいものである。

「ヘソ」を押えながら道端に頑張って、一度でいいから虎のフンドシをのぞいてみたいものである。昔から、地震・雷・火事・オヤジと恐ろしがられて来ているが、雷の力が恐ろしいということだけでなく、いつ、どこに落ちるか判らないという恐ろしさが、今日でも変わらぬ通用語となっている所以である。

西穂の落雷の少し前のことであるが、松本平の平地でさえ、野良仕事の最中に被雷して落命した人がいる。平地であっても、このような悲劇は、過去をたどればあちこちに限りなくあることであろう。

次に金属類の扱いについてであるが、これもまた、完全な処置を施すことは不可能なことである。濃霧や霧雨に包まれたり、急に雨が降り出したりした時に、髪の毛が逆立つような感じがしたり、手に持つピッケルに、いやな感じを受けて、あわてて放り出したりすることがよくある。高い山では、稜線や支尾根ばかりでなく、沢を登っている時でも、霧

の中で、髪を引かれることがあるものだ。

でも、あわてて放り出せる物は、ピッケルや時計ぐらいなものである。アクロバチックな岩登りに用いる道具は別として、市販されている一般の登山用装備品を、注意して集めてみても、必ず金属がどこかに用いられている。登山靴の底や、軽装のキャラバンシューズの底にはじまって、靴ひもの止め金、ニッカーズポンの止め口、ズボンのファスナー、ズボンのバンドの止め金、飾りの大きなバックルなんて不用なものを外したところで、落雷に際しては、バンドの止め金も飾りのバックルも大した変わりはないだろう。ザックにしても例外ではなく、止め金がいっぱいいろいろ。眼鏡や入れ歯も危険がいっぱいいた。まさかバンドを外して、片手でズボンを押えながら逃げ出すことも出来ないし、入れ歯を抜いて、眼鏡を捨て、登山靴をぬいで駆け出すわけにいかないだろう。今回の西穂の遭難の場合、あの大きな鎖がありながら、それが直接の原因でもないということだ。夏山登山という楽しみには、必ず雷の危険はついてまわるのだ。事が起きた後、何だかんだともっともらしいことを言う人達の説を尊重するならば、そんなことまでして、敢えてその安全性の徹底を図るということなら、何も苦労して山になんか登らなくとも、家で蚊帳の中に入って本でも読んでいればよいだろうと言いたくなる。

とりとめのないことを、あれこれ持ち出してしまったが、「予測できる雷」だとか「引率者に甘い判断?」だとかいう、当時の新聞見出しに対する、私なりのささやかな反論である。

八月一日、午後九時。在郷の山岳部OB達は、出来得る限り救援のための連絡や準備を整えてから、私は小林俊樹先輩と、トラックにて松本を発った。ドライアイスは時間が遅くてどうしても間に合わなかったが、生花は忘れずに、いっぱい用意していった。

十一時、上高地に到着。

木村小屋は報道関係の車が詰めかけているので素通り。庄吉小屋に寄って、いっさきに西穂独標へ向かう心算りだったが、おそらく西糸屋が、遭難対策本部になるだろうということと、奥原教永先輩を訪ねる。県警・救助隊本部・駐在所・西穂山荘・深志高校と、諸々の連絡や問題について、校長先生を中心に多くの人達が忙しく動き回っている。よくあることだが、どさくさにまぎれて、とかく感情問題がこじれ、トラブルが起きやすいのが常である。ましてや、最盛期を迎えた上高地にて、対策本部を設けることは並大抵のことではない。山岳遭難救助隊との折り合いや、県警関係、遺族やその関係者の受け入れ等、全てのことがスムーズに進んでいた。これらは陣頭に立って指揮されている校長先生は勿論、相も変わらぬ当地奥原先輩の人柄の賜物であったと思う。

時間の経過につれて、真夜中になつても、遠くから続々と多くの人が集まって来る。卒業生やPTAの人々、先輩や後輩、山岳部OBや山岳部現役。実に伝統ある母校愛と、後輩への愛情が、各々年齢の差はあっても、これまでに多勢の人々に引き継がれている



のかと思って、なんとも頼もしかった。集まった全員が分担協力すれば、たとえ時間はかかるっても、手厚く遺体を一つ一つ引き上げることが出来る。誰もが地に這いつくばってでも、という気持ちであった。

県警、小野・青木教諭、馬力あるOB荒井、高田の一行が先発し、しばらくして私達も山荘へ向かって出発した。死亡確認者は、ともかくとして、行方不明三名と、山荘に収容されている負傷者の処置が第一の問題である。重傷者は一刻も早く松本へ安全に下ろさねばならない。暫定的に、山荘から上の全ての記録は、小林俊樹先輩が最適任ということで、快く引き受けられた。後続してかけつけて来られた三原先輩は、次々と発生して来る諸問題を一括して担当する総務的な役割についてもらった。

行方不明三名については、岳沢側へ転落し、ほぼ絶望視されていた。しかし、確認が無い以上、生きている可能性もある。夜明けを待って、搜索に当たるということになった。涸沢より、夜を徹してかけつけた県警常駐隊員と、山岳部OB高田・荒井が山荘から搜索に先発する。私は田中弘美OBと共に、岳沢側にてこのサポートに当たる。その他、山荘に到着した卒業生のうち、遺体運搬のためまず十二名が独標まで登って待機することにした。独標の上には、いたいけな生徒の遺体が、所せまく収容されている。独標の岐阜県側に建てられていた一メートル位のケルンは跡形もなくすっ飛ばされている。飛騨側に突き出ていた大きな岩の突先も、赤い岩肌を残してめくりとられ、谷間に飛び散り、落雷のものすごさを、さまざまと物語っている。事件直後、いち速くかけつけて、多勢のけが人や、転落している遺体を、独標の上まで収容された西穂山荘の人達の並々ならぬご苦労が、ひと目で感じとられる。

間もなくして、転落して行方不明となっていた三名は、同じ場所に折り重なるようにして遺体で発見された。ハイマツを切って作った芝ゾリに遺体を収容し、稜線へ計上げることも考えられたが、結局、岳沢を下ろすことにした。この作業に当たったグループは、少人数のためと、トランシーバーの連絡がうまく取れなかつたことで、がら場から灌木帯へと簡単に考え、食糧や水を充分に用意していなかつたので、運搬に相当苦労をしていた。こんな場合でも、大学山岳部員の高田は、やはり現役の力強さを、いかんなく發揮して、終始ずば抜けた活躍を見せていた。

自衛隊のヘリコプターが、山荘前から遺体を運び降ろしてくれるという確実な情報を知って、これ程心強く思ったことはなかった。そうなれば、一日で全員松本まで遺体を収容できるからだ。

独標から急な一カ所通過すれば、あとは山荘まで割合平易なハイマツの間を行く道である。しかし、いくつもの遺体を独標から平坦部へ降ろすまでが、また大変なことであった。山荘の村上守さんが独標での陣頭指揮を取ってくれている。

三角形の背負い子が三つ用意された。固定のメインロープを片手に握り、片手で岩をつかみ、徐々にゆるめてくれる確保用のロープが、いっぱいになるところまで降りる。少しでもバランスをくずすと、遺体と共に岩にぶつかり、いやという程腰を打つ。それでも、慎重に気配りをしながら、無事遺体を降ろし終えた。平坦部では、自衛隊のレンジャー部隊員が、背負い子から遺体を外し、担架に収容してスムーズに山荘前のヘリポートまで運んでくれた。平坦地とはいえ、独標下から山荘までは長い道程だった。一つの遺体を背負い降ろすにも、三、四名が担がねばならない。レンジャー隊員の統率された行動とバイタリティーが、全遺体収容に当たって、これ程まで時間的短縮をはかってくれたとは。

仮に、協力がなかったとすれば、丸二日や三日はかかるに違いない。遺体となった少

年達の顔は、全てが綺麗であった。清らかな初々しい顔つきのままである。最近、若者達の間に流行っている記録本位の登山。敢えて、危険度の高い、特別な場所を、特別な時期に、特別な方法で登る。言わば前衛的登山とでもいうのか。そんなものを求めてあえない犠牲になった人達の遺体には、その悲惨な姿に、目を被いたくなるものがあるが、それとは全く異質なものであった。

顔に軽い搔傷はありながら、静かな小さい吐息さえ、うかがえそうな、微笑さえ投げかけてきそうな姿であった。ある者は、永遠に消え去ってしまった温もりさえ触れなければ、全く仮眠でもしているかのように、今にパッチリと瞳を開いて起き上がりそうな感じさえする姿であった。この世に生を受け十数年。親の翼の下で、ただひたすら、すぐすくと育ち、世間の裏表や穢れも知らず、純粹に生き、純粹に学んで来た後輩達よ。これから歩む道が、君達の人生であるというのに。それだけに気の毒でどうしようもなかった。やりきれなく涙が流れた。もし多勢かけ参じてくれた救援の人々や、ヘリコプター等機動力がなくとも、一人で頑張

ってでも、たとえ地に這  
いつくばっても、彼等を  
背負って大切に家まで送  
り届けてやろうと、不  
可能を可能ならしめる意氣  
込みに駆り立てられ、涙  
も出さず、痛みさえ訴え  
ない一人の後輩を静かに  
抱えあげた。

(深志 5回・山岳部  
OB)

